

『日本書紀』が書かなかった「天孫降臨」

2023.10.07 伊藤雅文

大和を治めた饒速日命

今回発表の「天孫降臨」は、饒速日命による大和への降臨を指す。

饒速日命は、『日本書紀』神武天皇紀に登場する。神武天皇の前に大和を治めていた。神武東征譚において、饒速日命は天神の子とされ、長髓彦とともに大和を治めていたと記される。

饒速日命については、もう一つ注目すべき記事がある。神武天皇31年条の巡幸記事である。そこでは、大和の命名について語られている。

神武天皇はこのとき大和を「秋津洲」と名付けるが、記事はそれ以前の命名について以下のように続ける。

- ・昔、伊弉諾尊は、「日本（やまと）は心安らぐ国、良い武器が沢山ある国、勝れていて良く整った国」と名付けた。
- ・また大己貴大神は、「玉牆の内つ国」と名付けた。
- ・そして、饒速日命は、「空見つ日本（やまと）の国」と名付けた。

筆者は伊弉諾尊を純粋な天地開闢神話の登場神と考えるため除外するが、大和の地が、（1）大己貴神、（2）饒速日命、（3）神武天皇という順で命名されていたと読み取れる。

すなわち、大和を治める人物が大己貴神→饒速日命→神武天皇という順に交代していったことがわかる。饒速日命は、大己貴神の治世と神武天皇の治世の間の期間を治めていたということになる。

饒速日命の正体

饒速日命の前に大和を治めていたのは大己貴神である。

大己貴神は「出雲の国譲り」神話に登場する。父は素戔嗚尊、子は事代主神である。

「出雲の国譲り」では、大己貴神・事代主神の親子神は、高天原の高皇産霊尊が派遣した経津主神と武甕槌神に国譲りを迫られ、国を差し出す。

『日本書紀』では、こののち経津主神・武甕槌神は高天原に帰還し、高皇産霊尊が瓊瓊杵尊を天孫降臨させるという展開になる。

しかし、「出雲の国譲り」と「日向への天孫降臨」の間には文脈上、大きな矛盾がある。

大和の命名譚から、大己貴神と事代主神の治める国の領域が大和に及んでい

たことは明白である。大和を「玉牆の内つ国」と名付けているからである。

そして、瓊瓊杵尊が大和に降臨していないことも明白である。瓊瓊杵尊の子孫である神武天皇が大和へ東征するからである。

譲られた国と降臨した国が明らかに異なっている。

『日本書紀』は国譲り後の詳細な経緯は記さない。だが、以上のことから大己貴神の次に大和を治めたのは饒速日命であったと推測できる。

ここで饒速日命の正体に迫りたい。

「出雲の国譲り」では、最初に天穗日命が派遣される。しかし、3年経っても復命しないため、子の大背飯三熊之大人(武三熊之大人)が送られる。ところが、大背飯三熊之大人も復命せず、次に天稚彦が送られる。

この天稚彦も大己貴神の娘の下照姫を妻として復命しない。そこで、経津主神に武甕槌神を付けて送り、やっと国譲りが完遂されるという流れになっている。

『古事記』では天菩比命の次に天若日子が送られ、その次に武御雷之男神に天鳥船神を付けて派遣して国譲りが完遂される。

もうひとつ、「出雲国造神賀詞」という文献資料がある。「出雲国造は天穗日命の子孫である」と明記して次のように続ける。

まず、高天原の高御魂神魂命(高皇産霊尊)が、出雲臣らの遠祖である天穗比命を天下の視察に派遣する。

復命した天穗比命は「豊葦原の水穂国は荒々しい国だが平定してみせましょう」と言い、自身の子である天夷鳥命に布都主命を副えて派遣する。そして、この二神が大穴持命(大己貴神)を鎮めるのである。

このように見てくると重要人物は天穗日命とその子であることがわかる。

「出雲国造神賀詞」は天穗日命が出雲国造の祖先だとするし、『日本書紀』も不思議なことに復命しなかった天穗日命を出雲臣の祖先だと明記しているのである。

そして、『日本書紀』では天穗日命の子は大背飯三熊之大人(武三熊之大人)だが、「出雲国造神賀詞」では天夷鳥命であり、『古事記』では建比良鳥命である。

また、『日本書紀』崇神天皇紀60年条に、「天皇が出雲大神の宮にある武日照命が天から持ってきた神宝を見たい」と述べる記事がある。そこでは、武日照命の別名として武夷鳥、天夷鳥が記される。

つまり、天穗日命の子は大己貴神に差し出させた国を統治した可能性があるということになる。そして、それは天から飛び降ってきて大和を「空見つ日本(やまと)の国」と名付けた饒速日命だと推察できるのである。

この饒速日命は、武日照命であり、武夷鳥命であり、天夷鳥命であり、大背飯三熊之大人、別名武三熊之大人であるとみることができる。

消えた饒速日命の天孫降臨

饒速日命を大背飯三熊之大人とみると、系譜上、天照大神の孫となる。

皇祖高皇産靈尊の孫の瓊瓊杵尊による日向への降臨を「天孫降臨」とするなら、天照大神を皇祖神とした場合、孫の饒速日命による出雲と大和と含む葦原中国への降臨も「天孫降臨」であると言える。

つまり、近い時期に2つの天孫降臨があったと考えられる。

※詳細は省くが、筆者は瓊瓊杵尊の天孫降臨は250年の少し前、饒速日命の天孫降臨は260年代半ば～後半であったと推測する。

ではなぜ、瓊瓊杵尊の天孫降臨は『日本書紀』に採用され、饒速日命の天孫降臨は抹消されたのか。

それは、その後の歴史によるものだと考えられる。

国譲り後に大和へ入った饒速日命は、長髓彦の妹三炊屋媛を娶り、安定的な支配体制を築いていったと思われる。

饒速日命に敗れた事代主神は吉備に逃れる。(※筆者推論)

一方、瓊瓊杵尊には降臨直後に男子が生まれる。筆者が初代天皇と考える彦火火出見尊である。彦火火出見尊は謎の人物塩土老翁の手引きにより、吉備の事代主神(海神)と手を結ぶ。この事代主神の娘が、筆者が初代皇后だと考える豊玉姫(媛蹈鞰五十鈴媛と同一人物であると推定)である。

この同盟により日向を平定した初代天皇は、「東の方に天下を治めるのによい土地がある」という塩土老翁のアドバイスにしたがい大和制圧を目指す。これがいわゆる神武東征だが、事代主神にとっては大和を取り返す雪辱戦でもあった。

神武・事代主連合軍は、長髓彦軍と激戦を繰り広げるが、最終的に饒速日命が長髓彦を殺して帰順する。

※ただし、このとき帰順した饒速日命は大背飯三熊之大人ではなく、子の可美真手命すなわち二代目饒速日命であったと推測する。

さて、このような経緯で初代天皇が即位し、ヤマト王権が誕生したのである。

このように見てくれば、なぜ瓊瓊杵尊の天孫降臨が採用され、饒速日命の天孫降臨は外されたのかは明らかである。どちらの系譜が後の日本に繋がっているかで取捨選択されたのである。勝者の系譜は称えられ、敗者の系譜は闇に葬られたとみることができる。(終わり)